

# やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	24 / 2008 / 37-38
タイトル	共生の郷 (メダカ共和国)
著者名	五十嵐正俊

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

## 共生の郷(メダカ共和国)

第3代 五十嵐 正俊

青森市内の環状バイパスを東進すると、並行していた高速道と分かれる辺りに変わった吹き流し(写真1)が有るのをご存じだろうか?そして路上には「メダカ共和国」入り口の標識も立っている。バイパスから逸れて右折すると池がある。これは2002年、国土交通省が造成した国営の「ビオトープ(<http://www.thr.milit.go.jp>) 共生の郷 メダカ郷和国」である。



[写真1] メダカのぼり



[写真2] メダカ共和国



[写真3] 調査風景(右端は佐原教授)



[写真4] 夏のメダカ共和国

国土交通省は環状バイパス道路の延長工事施工にあたり、予定ルート of 環境調査を行った。その結果、予定地内には「メダカ *Oryzias latipes*」の生息を確認されていたのだった。幸か不幸か、1999年環境庁(現環境省)から発表されたレッドデータに新たな絶滅危惧種として「メダカ」を絶滅危惧種Ⅱ類に指定するというショッキングな発表がなされたのであった。

「メダカ」は日本の水田耕作とともに最も馴染みの深い魚で、水田の用水路と水田の中を往復しながら繁殖を繰り返していた体長4cm足らずの小魚で、童謡にも歌われていた。ところが、稲作の技術革新は大型機械導入のため農業基盤整備事業→乾田化→用水路の構造改変(コンクリート3面張り、パイプライン方式)へと激変していったのであった。同時に水田周辺に行けば何処にでも見られた「メダカ」が姿を消し、「野生メダカ保存会」なども立ち上げられていた。

この様な情勢の中で、国土交通省としても「メダカ」の棲息を無視して工事を進めることは出来なかったのである。そこで急遽付近の住民、学識経験者等を招集して対策委員会が結成されたのであった。私は退職後何気なくインターネット情報で「野生メダカ保存会」の存在を知り、全国の「メダカ分布図」作成に協力する意味で、青森市内で確認した情報を提供したのであった。青森県下では第1号の情報提供者と言うことで自動的に「野生メダカ保存会の青森支部長」と言う肩書きを頂戴することになってしまったのであった。その後、数回情報を提供している内に「野生メダカ保存会副会長」なる名誉職?まで頂戴してしまったのであった。対策委員会が発会する情報は新聞紙上で知り、傍聴の一人として出席したのであった。その場所で「しらかば保育園」の理事長である小山内孝さん(正規委員)佐原雄二さん(弘大農学生命科学部教授=淡水魚専門:正規委員)らと始めてお会いすることとなったのであった(特に小山内孝さんとはご近所だったので以後頻りに交際を続けることになったのである)。以来、私も委員の一人としてこの「メダ

カ問題対策委員会」に出席してきたのであった。委員会では池の構造、デザイン、用水の確保などについて熱心な討議が続けられ、2002年から造成が始まったのであった。

いっぽう、工事の実行に先立ち、付近(原別)の小学生たちによる「メダカ救出大作戦」も行われた。この結果、数百頭の「野生メダカ」が大型水槽の中に確保されたのであった。池の規模、形も決まり、池の中には「メダカ」の形に配置した杭を打ち込むデザイン(近くに住む主婦 K さん発案)も決まり、工事が始まったのであった。池の中には原則として付近の野生植物を移植することとなり、水の張られた池に付近の水田、用水路などからそれぞれ数株程度の野生植物が移植され、確保されていた「メダカ」も放流されたのであった。移植された植物の中には最近あまり見かけなくなった「マコモ」「オモダカ」「ショウブ」「アサザ」「トチカガミ」なども含まれていた。

また、池内の遺伝子が固定化しないためにもと、全国初めての試みである「メダカ専用」の魚道が設置され、付近の水田に生き残っている「メダカ」たちとの交流が配慮されている。この魚道の効果については弘大佐原教授の下で調査された(写真3)。放流されたメダカは順調に繁殖して池の岸に立つと「メダカの学校」も観察出来るようになったのであった。

しかし、問題も派生するようになってきている。「メダカ」の繁殖場所である水田は農家の人々による水路の泥上げ、草刈りなど水稻耕作の付随作業によって環境が維持されていたのである。ビオトープを造ったからといって「メダカ」が勝手に増えてくれるわけではなかったのである。水質にも関係すると思われるが、移植した「マコモ」や「アサザ」はあっという間に水面を覆い「メダカ」など全く見えなくなってしまったのである。また、放流時に紛れ込んでいたと思われる「モツゴ」が大繁殖して「メダカ」を圧倒する状態になってしまったのである。現在は、年2~3回の「マコモ」「アサザ」(絶滅危惧Ⅱ類)の刈り取り作業も行われている。

また今年5月には「モツゴ」対策の一環として宮城県の「シナモツゴ郷の会」《やぶなべ会27代の川村(石井)洋子さんは同会の中心メンバーの一人(理事)でもある》が開発した「シナイモツゴ」の産卵誘致法(プラスチックの植木鉢を池に浮かべる:写真8)の逆利用を試みた。思惑通り、投入した植木鉢には多数の産卵が確認され、「モツゴ」の卵は可愛そうではあるが数千粒が撤去された。「マコモ」もある程度根から刈り取られたのでいくらか「メダカ」の遊泳も眺められるようになってきているのではないだろうか?

なお、このビオトープでは「メダカ」などの捕獲も認められているので家庭で鑑賞する程度の範囲内で持ち帰りも可能である。



[写真5] マコモ



[写真6] オモダカ



[写真7] アサザ



[写真8] モツゴの卵が産み付けられた植木鉢



[写真9] 共生の郷へ不法侵入(?)したナマズ